

サービスラーニング授業の開発

Development of Service Learning Program at Jiyugaoka Sanno College

中 村 知 子

Tomoko Nakamura

藤 原 由 美

Yumi Fujihara

三 浦 智恵子

Chieko Miura

抄 録 2003年度から本学で実施されている「キャンパスサービスラーニング」という科目は、早くから米国で取り入れられてきた体験的教育を基礎としたサービスラーニング (Service-Learning) という教育手法を用いた授業である。現在、このサービスラーニングに対する社会での認識が高まり、多くの大学で、この手法を取り入れた授業や学内活動が実施されるようになってきた。そこで、サービスラーニングに対する社会の認識の高まりや捉え方の変化に伴い、このサービスラーニングという教育手法を用いた新たな科目の開発を行うことが必要となってきた。今回、サービスラーニングを取り入れた学生活動や授業に積極的に取り組んでいる他大学の現状や、本学の教育方針に沿うという点に留意しながら、サービスラーニングの授業プログラムの開発を行った。「サービスラーニング」の授業プログラムの開発、実施、実施結果について報告する。

キーワード サービスラーニング, ピアサポート, ボランティア, PDS (Plan-Do-See), 授業開発
Service Learning, Peer support, Volunteer, PDS (Plan-Do-See), Developing Curriculum

1. はじめに
2. サービスラーニングの歴史と現状
 2. 1 サービスラーニングとは
 2. 2 米国におけるサービスラーニングの現状
 2. 3 日本におけるサービスラーニングの現状
3. サービスラーニングの教育に関する事例研究
 3. 1 米国における事例
 - (1) 全米青年リーダーシップ評議会の3ステップ
 - (2) メリーランド州の4ステップ
 - (3) ワシントン州の6ステップ
 3. 2 日本における事例
 - (1) 愛媛大学
 - (2) 国際基督教大学
 - (3) 立命館大学
4. 「サービスラーニング」授業の開発
 4. 1 授業開発の経緯
 4. 2 科目の概要
 - (1) 到達目標
 - (2) 授業スケジュールおよび教育方法
5. 授業実施結果
 5. 1 実施クラスの概要
 5. 2 アンケート実施結果
 - (1) 理解度アンケート結果
 - ①コースの割合
 - ②参加している活動
 - ③「サービスラーニング」に関する理解度について
 - ④自由記述
 - (2) 授業評価結果
 5. 3 「振り返りシート」による評価
 5. 4 考察
6. 結論と今後の課題

1. はじめに

学生が体験から生きた知識を学ぶ体験学習を用いた授業や活動が、今、多くの大学で行われている。

この体験から生きた知識を学ぶサービスラーニング（Service-Learning、以下、SLとする）は、米国では、1960年代から教育機関で導入されてきた。

SLとは、「学生たちの自発的な意志に基づいて、一定期間、社会奉仕活動（サービス活動）を体験させ、これまで教室などで知識として学んできたことを実際のサービス体験に応用し、また実際の体験から生きた知識を学ぶ新しい『体験学習』のプログラムである」¹⁾とされている。

日本においても、多くの大学の授業や学内活動で取り上げられ、実施されている。大学のみならず小・中・高等学校においても、「総合学習」の時間などで取り上げられ、実施されるようになってきた。

本学においても、2003年度から「キャンパスサービスラーニング」という科目を設け、このSLを実施してきた。ただ、この科目においては、学内活動を行っている学生のみを履修対象者としていたため、全学生が履修することができなかった。また、授業内容も履修対象者にあわせて学内のサービス活動に限定したものとなっていた。このような背景から、全学生が受講でき、SLを体系的に学習することができる新たな授業プログラムを開発することにした。

この新たな授業プログラムの開発にあたって、まずSLを体系立てて学習できるようにする。次に、本学が重点を置いている「周りへの配慮ができる人間性」「キャンパスコミ

ュニティの一員としての自覚を持った社会性」「交流から得られる自己発見ができる学習」という本学の人間教育の内容を踏まえた本学の特性を活かした授業プログラムになるように配慮した。科目の名称も「サービスラーニング」とした。

今回、この「サービスラーニング」という授業プログラムを開発するにあたって、まず米国および日本の現状調査と事例研究の文献調査を行った。次に、SLを取り入れた学生活動や授業を積極的に実施している大学の状況調査とインタビュー調査を実施した。これらの調査結果を踏まえながら、本学の教育方針に沿った授業プログラムの開発を行った。

本研究では、この「サービスラーニング」の授業プログラムの開発と開発した授業プログラムの実施、その実施結果の検証までを行うことを目的とした。

2. サービスラーニングの歴史と現状

2.1 サービスラーニングとは

SLの概念は、1930年代に米国の教育学者であるジョン・デューイ（Dewey）によって提唱された体験的教育理論がその基礎とされている。²⁾ このサービス学習という体験からの実践的な学びを行う学習方法やそのプログラムをSLと呼ぶようになったのは、1960年代後半である。それまでは、サービス活動やボランティア活動として捉えられ、1933年から1942年にルーズベルト大統領によって創設された市民擁護団体において、数百万人の学生が国立公園の支援などのサービス活動を実施している。その後、1960年代後半に、オークリッジ大学協会と「テネシー川流域開発公社」が支流地域開発を協働実施する際に、こ

の学生と支流地域開発組織を結びつけるプログラムを説明する用語として初めてサービ斯拉ーニングという言葉が公に使用された。この後、サービ斯拉ーニングとしてこの学習方法やサービス活動が多く教育機関や団体に浸透していった。³⁾

このような歴史を持つSLと従来のボランティア活動の違いは、「あくまでも、SLが教育機関における教授法の一種であるところにある」。⁴⁾ また、「提供する側からの一方的な奉仕活動（サービス）だけではなく、奉仕活動を通してそれを受ける側から、または活動自体から学ぶ（ラーニング）という双方向的要素が大きな特徴」⁵⁾の一つであると言える。

2. 2 米国におけるサービ斯拉ーニングの現状

SLが米国の大学などの教育機関で本格的に導入されるようになったのは、1980年代以降である。SLを通して地域などにおけるサービス活動に学生を実際に関わらせることにより、そこから得られる学びが社会で必要とされる力になると考えた。このような教育を「市民性教育（Citizenship Education）」と呼び、自分がコミュニティに属し、なおかつ、そのコミュニティを形成している一員であることを自覚する力を養うものとされている。さらに、将来、市民としての役割を果たせるよう、地域社会への積極的参加を行う素養の育成などが行われている。

米国でSLが広く行われるようになったのは、1990年に「国家及びコミュニティ・サービス法（National and Community Service Act）」が制定され「国家及びコミュニティ・サービス協会（The Corporation for National

and Community Service)」が設立されてからである。SLは従来から学生の市民性を涵養する学びとして行われていたが、これらによって政府のバックアップの下、小学校から大学まで幅広く行われるようになった。SLの内容はさまざまであるが社会貢献型の体験学習として行われることは共通している。小学校から自分が属するコミュニティを意識し、そこで自らが行動することの大切さを理解し、自らの行動の振り返りを行うことによって物事を多角的に考えていく力を養っていると言える。

2. 3 日本におけるサービ斯拉ーニングの現状

SLが日本の大学などの教育機関で導入されるようになったのは、1990年代後半であり、一般に普及し始めたのは2000年以降である。中央教育審議会は、2002年に文部科学大臣に対して「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」答申し、その中で、大学、短期大学、高等専門学校などにおいて、ボランティア科目やSL科目などを開設することが望ましいとした。さらに2007年には、「学士課程教育の再構築にむけて」の審議経過報告の中で、SLは学士課程教育に有効な体験的学習法とした。そのため、最近では小・中・高等学校で実施されている「総合的な学習の時間」にSLを行う学校が増えてきており、注目が集まっていると言える。

3. サービスラーニングの教育に関する事例研究

3. 1 米国における事例

米国におけるSLの教育に関する事例を、

そのカリキュラムの観点から3つ述べる。これらのカリキュラムは、本学におけるS Lの授業プログラム開発の枠組みとして用いることができると思われる。

(1) 全米青年リーダーシップ評議会の3ステップ

全米青年リーダーシップ評議会 (National Youth Leadership Council) のトーレ (Toole) はS LのカリキュラムサイクルにP D Sサイクルを当てはめ、3つのステップを示した。すなわち①Plan (計画, プロジェクトの明確化), ②Do (実行, サービスの実践), ③See (評価, 学習の振り返りと新たな理解) である。⁶⁾

(2) メリーランド州の4ステップ

メリーランド州のメリーランド州児童・生徒サービス活動連盟 (Maryland Student Service Alliance Fellow) は、S Lの実践モデルを4つのステップから構成されるものとした。すなわち、①Preparation (準備, S L活動と授業の目的を関連付ける), ②Action (実践, 体験的奉仕活動を実践する), ③Reflection (振り返り), ④Celebration (祝福, サービス活動が成功した場合に、パーティーを開いたり賞を授与するなど何らかの形でお祝いをする) である。⁶⁾ メリーランド州では州内全ての高校においてS Lが導入されている。

(3) ワシントン州の6ステップ

ワシントン州にある全国サービス協会 (Corporation for National Service) のS L研究担当者ウォーノック (Wornock) は、S Lの学習過程を6ステップとした。すなわち、①Discuss (問題把握, 気づき), ②Investigate (調査), ③Address (目標の明確

化), ④Plan (実践計画), ⑤Execute (サービス実践), ⑥Reflect (振り返り, 新課題の抽出) である。⁷⁾ この6ステップはワシントン州全体にほぼ浸透している。

3. 2 日本における事例

日本でS Lの教育を実施している大学の活動内容としては、ノートテイクや地域・ボランティア団体と連携した活動、国際協力分野での活動などがある。今回、13の大学・短期大学のS Lの実施状況を調査結果としてまとめた。(資料1参照)

この調査結果の中から、インタビュー調査を行った代表的な3つの大学の事例について述べる。この3つの大学の教育理念を基盤としたS Lの内容は、本学におけるS Lの授業プログラムを本学の教育理念と合致させて実施していく上で参考になると思われる。

(1) 愛媛大学^{注1)}

愛媛大学のS Lは、愛媛県にあるお遍路さんに対して地元の人々が無理をしない範囲で食べ物や心づけを施す極めて日常的な「お接待」と呼ばれる文化を基盤としている。いわば「お接待」の心に学ぶキャンパスボランティアであり、草の根的に行われてきた学生同士の支援活動のさらなる発展を大学が支援している。学びの支援, 生活の支援, 障害学生の支援, 留学生の支援, 高校生・新入生の支援活動などを通して、学生相互の「教えあい, 学びあい, 助け合う」力を高めることを目的としており、6つのグループが、キャンパス内で、できる範囲で支援活動を日常的に行っている。

(2) 国際基督教大学^{注2)}

国際基督教大学 (以下、ICUとする) の

SLは、キリスト教の奉仕の精神を基に、学生が自発的な意志にもとづいて一定の期間、社会奉仕活動を体験するものである。この体験から、それまで大学などで知識として学んできたことを実際に活かし、また実際の体験から自分の学問への取り組みや進路などについての新たな視野を得ることを目的としている。

ICUのSLには、「国際サービス・ラーニング」や「コミュニティ・サービス・ラーニング」などの授業があり単位が与えられる。SLの活動内容としては、キャンパスがある三鷹市から沖縄県まで日本国内全地域と海外の大学と提携して行うものまであり、活動期間も半年から1年以上のものまである。

(3) 立命館大学^{注3}

立命館大学のSLは、ボランティアセンターが中心となって大学と地域のネットワークを構築し、幅広く社会貢献を行っている。

「地域活性化プログラム」という教育効果が見込まれる地域活性化のボランティアプログラムを実施し、これらの活動に参加し、所定の基準を満たした学生には単位認定も行っている。

この大学のSLは、教学理念としてあげられている「地域の社会問題を地域の人と一緒に解決する」ことであり、市民性が基盤となっている。

4. 「サービスラーニング」授業の開発

4. 1 授業開発の経緯

自由が丘産能短期大学において実施されている学生の学内活動には、「SSS（サンノースチューデントスタッフ）活動」（以下SSS活動とする）、「能友会」、「自由が丘産能祭実行委員」などの正課外活動がある。また、必

修科目においても、1、2年生が互いにサポートし合う「学びのサポートⅠ・Ⅱ・Ⅲ」や、グループワークが中心となる「チーム学習へのステップ」、「フィールドワーク」、「課題実践研究Ⅰ・Ⅱ」などの科目がある。

これらの活動や科目は、正課・正課外を問わず、「周りへの配慮ができる人間性」「キャンパスコミュニティの一員としての自覚を持った社会性」「交流から得られる自己発見ができる学習」という自由が丘産能短期大学が重視している「人間教育」を実現するためのものである。

このような人間教育の充実を図る必修科目はすべての学生が履修するが、2003年度から実施している「キャンパスサービ斯拉ーニング」は、学内活動であるSSS活動を行っている学生のみを対象としていた。そのため、学内活動に参加しない学生は、この「キャンパスサービ斯拉ーニング」を履修できなかった。

そこで、全学生を対象にしてSLを体系立てて学習する科目として、以下のような点に配慮しながら「サービ斯拉ーニング」という授業プログラムの開発を行った。

4. 2 科目の概要

「サービ斯拉ーニング」科目の開発にあたっては、①サービ斯拉ーニング活動の根幹として、本学の建学の精神に基づいた授業プログラムとすること ②前述の必修科目との連携を考慮すること ③学内活動に参加している学生には履修を強く勧めるという点を基本方針とした。また、この科目の実施時期としては、1学年の後学期とした。

これらの基本方針をもとに、到達目標や授業スケジュール、教育方法を以下のように設

表 1

No	授業項目	授業内容	課題
1	ガイダンスとSLについて	ガイダンス、評価、サービスマーケティングとは？、建学の精神とは？	
2	ピアサポート	ピアサポートとは何か？、自分の周りのピアサポート、ピアサポートのGW	
3	ボランティア	ボランティアとは何か？、ボランティアのGW	ボランティアに関する課題
4	課題と問題解決（1）	課題に対するグループ討議	グループ討議のための情報収集、検討をまとめる
5	課題と問題解決（2）	課題に対するグループ討議、発表準備	発表リハーサル、発表資料の準備
6	発表と振り返り	全体発表と振り返り、まとめ	
7	まとめ	これまでの学習内容の振り返り、建学の精神とこれらのつながりについて	

定した。

（１）到達目標

到達目標として以下の３つを設定した。

①サービスマーケティングについての基本的な知識を理解することができる。また、ピアサポート、ボランティアなどの活動について理解し、イメージすることができる。

②自分とは違うさまざまな人の考えや立場に、気づくことができるようになる。

③本学の建学の精神を理解し、この建学の精神に基づいたサービスマーケティングなどについて考えることができるようになる。

（２）授業スケジュールおよび教育方法

授業スケジュールおよび学習内容は、SL、ピアサポート、ボランティアに関するグループワークを中心としたものとなる。詳細は、表１の通りである。

教育方法に関しては、講義は最小限の基礎知識の解説にとどめ、グループ討議・演習を中心に進めることとした。また、自分が属す

るコミュニティである大学や大学周辺の地域などの身近な課題を解決するための目標を設定し、その目標を達成するための計画をグループメンバーと協力して行う演習を取り入れるなど、学生による自主的な活動を支援するようにした。

なお、「サービスマーケティング」科目を導入している他大学と同様、学習や活動を実際に行った後の「振り返り」を重視するようにした。このSLの「振り返り」は、前述の米国や日本における事例においても、SLの実践ステップの中の重要な構成要素として実施されていた。

そこで、今回開発した授業プログラムにおいても、毎回授業の終わりに、その授業回で学習したことや気づいたこと、感じたことなどを「振り返りシート」として言語化し、まとめさせるようにした。

表2 「各クラスの履修者数と所属コース」

クラス	履修者数	履修者の所属コース
A	10名	ビジネスマネジメント
B	26名	ビジネスマネジメント、秘書・観光・国際 経営情報
C	20名	秘書・観光・国際、医療・情報サービス
D	27名	医療・情報サービス、メディアデザイン、 経営情報

5. 授業実施結果

5. 1 実施クラスの概要

「サービスマネジメント」科目は、2009年度後学期前半科目（全コース対象の選択科目）として、4クラス編成で開講した。この4クラスのコース編成は、3コース合同のクラスが3クラスと時間割の関係で1コースのみとなる1クラスとなった。各クラスの履修者数および所属コースの内訳は表2の通りである。

5. 2 アンケート実施結果

授業最終回（第7回）に、「サービスマネジメント」科目履修者83名（有効回答数81）に対し、2種類のアンケートを配布・実施した。一つは科目独自の「理解度アンケート」（資料2参照）であり、「サービスマネジメント」科目における重要な学習ポイントについてどれくらい理解が深まったのか、学習目標に到達できたのかを調査した。

そして、もう一つは、学内の全科目共通で実施している「授業評価」である。

（1）理解度アンケート結果

①コースの割合

図1は、回答者（履修者）の所属するコースの割合を示したものである。

②参加している活動（複数回答可）

SLやボランティアにかかわりのある学内

外の活動に参加しているかどうかを質問した。

「SSS活動」に参加している学生が50.6%と半数以上いるのに対し、「何もしていない」が履修をした学生は、23.5%であった。

③「サービスマネジメント」に関する理解度について

全7回の授業を通して学習した内容や、グループワークの中で体験・実践した結果、得られた学習成果に関しての質問を行った。

各質問項目に対し学生は、原則、「5：とてもそう思う」「4：ややそう思う」「3：どちらともいえない」「2：あまりそう思わない」「1：全くそう思わない」のいずれかで回答している。なお、回答者の状況に該当しない質問項目（例えば、「5.他コースの仲間ができた」という質問項目に対し、クラスやグループに他のコースの学生がいなかった場合など）には「NA：（自分には）該当しない」を回答として選択できるようにした。

図3をみると、全ての質問項目において3.8ポイント以上の結果が出ており、授業を通じた理解度について、履修学生本人が、自らの学習成果に一定の評価をしていることがわかる。

また、この科目の学習の中心テーマである3項目「2.サービスマネジメントを理解する

図1 「コースの割合」

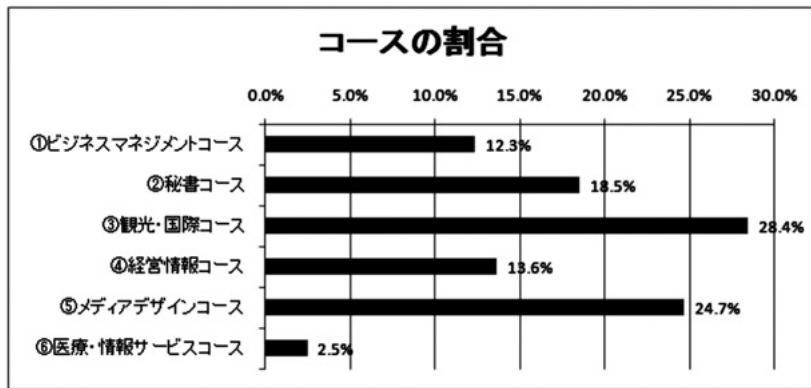


図2 「履修者が参加している活動について」

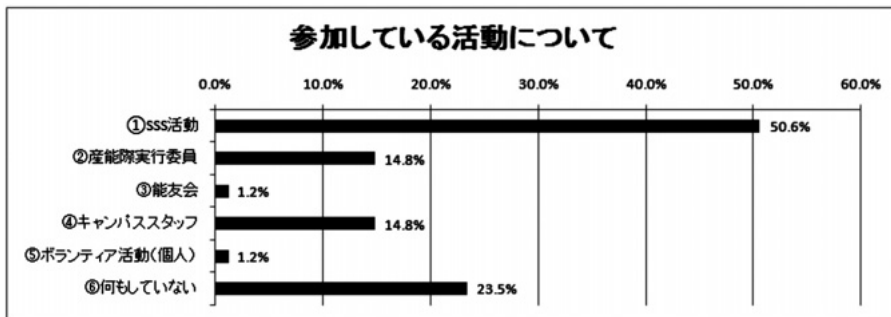
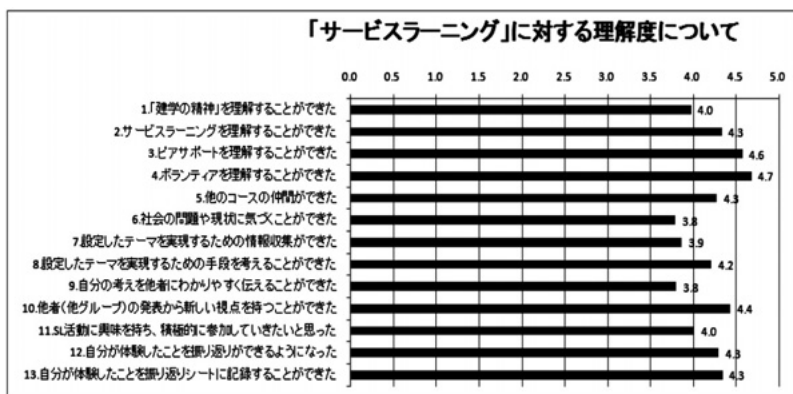


図3 「サービスマーケティングに対する理解度について」



ことができた」(4.3ポイント),「3.ピアサポートを理解することができた」(4.6ポイント),「4. ボランティアを理解することができた」(4.7ポイント)に関しては、特に高い評価結果となっている。

次に、振り返りについての質問項目である「12. 自分が体験したことを振り返りができるようになった」「13. 自分が体験したことを振り返りシートに記録することができた」も、ともに4.3ポイントとなっており、比較的よく理解できた、授業を通じて身に付いたと評価していることがわかる。

一方で、相対的に低い評価(4.0ポイント未満)となっているのは、「6. 社会の問題や現状に気づくことができた」(3.8ポイント),「7. 設定したテーマを実現するための情報収集ができた」(3.9ポイント),「9. 自分の考えを他者にわかりやすく伝えることができた」(3.8ポイント)の3項目であった。

④自由記述

アンケートの最後に自由記述欄を設け、授業の感想や授業に対する意見、自分が感じたことなどを記述してもらった。

まず、初めて体系的に学んだサービラーニング、ピアサポート、ボランティアに関しては、「ピアサポートやボランティアなどについての考え方を深めることができた。」「SLやピアサポートという活動の意味を全くと言っていいほど知らなかった。この授業により、ボランティアやサービス活動の楽しさを知った。またそれを上回るほどの大変さを知った。」「ボランティアについて改めて知るいい機会だし、SLやピアサポートという言葉も分かり、思いやりの心の大切さを深く理解することができた。」という肯定的な意見・

感想がほとんどであった。

また、異なるコースの学生と同じクラスになり、同じグループとして活動したことに關するコメントも多かった。具体的には、「他のコースの人とかかわりが持てて良かったです。」「予想外に他コースの人達とも仲良くできた。楽しかった。」「最初は自分だけ違うコースで不安だったけれど、最後にはとても楽しく終えることができた。」といった意見や感想がみられた。

一方、「SLの内容が分かりにくく未だに理解できない。」「建学の精神の理解が難しい。」という意見も少数あった。

(2) 授業評価結果

学内の全科目共通で実施している「授業評価」の結果は、図4の通りである。

「あなたは、この授業を全体として、良い授業であったと思いますか。」という質問に対する回答は、平均4.6ポイントと高い評価になっている。なお、この全体評価と同じか上回る数値となっている質問項目は、「この授業は、学習目標やねらいがハッキリしていたと思いますか。」(4.6ポイント),「教員は、分かりやすく教える工夫をしていたと思いますか。」(4.8ポイント)である。

一方、「授業の進め方のスピードは、理解するのに適切であったと思いますか。」という質問に対しては、4.2ポイントと比較的评价が低かった。

5. 3 「振り返りシート」による評価

前述の通り、「振り返り」を重視する授業プログラムの一環として、毎回授業の終わりに「振り返りシート」を学生に記述させた。(資料3, 4 参照) この「振り返りシート」

図4 「授業評価結果」

No	質問項目	思う		どちらとも言えない	思わない		全体 平均スコア
		5	4	3	2	1	
1	私は、この授業に意欲的に取り組んだ。	58.8%	35.3%	5.9%	0.0%	0.0%	4.53
2	この授業は、学習目標やねらいがハッキリしていたと思いますか。	61.8%	38.2%	0.0%	0.0%	0.0%	4.62
3	教員は、分かりやすく教える工夫をしていたと思いますか。	76.5%	23.5%	0.0%	0.0%	0.0%	4.76
4	テキストや教材は学習に適切なものだと思いますか。	35.3%	58.8%	5.9%	0.0%	0.0%	4.29
5	授業の進め方のスピードは、理解するのに適切であったと思いますか。	44.1%	29.4%	26.5%	0.0%	0.0%	4.18
6	教員は、学生の参加(質問・発言・課題提出など)を促したと思いますか。	55.9%	35.3%	8.8%	0.0%	0.0%	4.47
7	この授業や、課題の学習を通じて、学習目標は達成できたと思いますか。	41.2%	52.9%	5.9%	0.0%	0.0%	4.35
8	あなたは、この授業を全体として、良い授業であったと思いますか。	64.7%	32.4%	2.9%	0.0%	0.0%	4.62

は、第1回目に作成したものが資料3、授業終了近くの第6回目に作成したものが資料4となる。これらの「振り返りシート」の内容から学生のSLに対する期待や考えが深まっていく様子が伺える。

なお、授業第1回から第6回に記入した「振り返りシート」は、第7回(最終授業回)に記入者本人に返却し、授業全体を通じた自己の振り返りや個人の気づきを促すことができるようにした。

5. 4 考察

「理解度アンケート」「授業評価」「振り返りシート」の結果を概観すると、少なくとも、科目の到達目標の一つである「サービラーニングについての基本的な知識を理解することができる。また、ピアサポート、ボランティアなどの活動について理解し、イメージすることができる。」という点については、一定の教育効果をあげることができたと考えられる。

また、「理解度アンケート」で4.7ポイントと高い評価を得た「ボランティアを理解する

ことができた」に関しては、「グループワークにより、主体的に身近なボランティアについて考える」という教育方法を用いたことにより効果が高まったと考えることができる。

さらに、学生からは、授業で学習した範囲にとどまらず、学習したことをふまえて「積極的にボランティアやSSS活動に取り組みたい。」「これからの学内活動に活かしていきたい。」「という、今後の行動の変容につなげていこうという発展的な意見も見られた。

ただ、「建学の精神」と「サービラーニング」との関係を理解するという点においては、理解が難しいという意見があり、次年度への課題として検討する必要があると考える。

6. 結論と今後の課題

今回、新たに開発した「サービラーニング」という授業プログラムの実施結果から、SLやピアサポートなどの基本的な理解がなされ、そこから他者の気持ちを考えるなど考えを広げていくことができることがわかった。これは、本学の多くの授業で実施されて

いるグループワークの成果と「振り返りシート」を丁寧に作成するという作業から、自分や他者の行動や考えを内省することができたためと考える。

ただ、本学のS Lの根幹となる「建学の精神」や本学の教育方針をどのように学生に理解させ、それを深めていくかなどが、課題としてあげられる。

また、周囲に対する配慮などが弱まり、自分本位性が強まる傾向が見られる学生が増えていく中で、S Lの学習内容をどのように浸透させていくかという手法についての検証とその改善も課題としてあげられる。

この学習効果を学生に浸透させるための方法として、この授業と実際にS L活動を行っている学内活動との連携が考えられる。

授業で理解し考えたことを、学内活動を行っている仲間と協力しながら、実際に活動を実施していくことによって、S Lに対する学生の理解が深まっていくのではないかと考える。この授業で検討したS Lの活動内容を学内活動の仲間と共同して実施していくという点においては、今回のアンケート調査の自由記述の部分などから、これらを実施することによって一定の効果が得られるのではないかと推測される。

次に、この授業プログラムの効果を検証するための手法の検討も今後の課題である。

今回は、この授業プログラムの実施結果を検証する方法としてアンケート調査を行ったが、学生の心境の変化や効果については、実験研究で使用され、評価されている学生の自己意識の改善を測定する手法や⁸⁾、消費者の心境変化を測定するための手法としてE B Mモデルに独自のフィルターを追加してクラス

ター分析する手法⁹⁾など、さまざまな手法が考えられる。このような分析手法の検討も行いながら、授業プログラムの改善を行っていく必要があると考える。

謝辞

本稿の執筆にあたり、愛媛大学の佐藤浩章准教授と一柳元成氏、国際基督教大学サービス・ラーニング・センターの佐藤豊教授と村上むつ子氏、立命館大学サービスラーニングセンター、ボランティアセンターの奈良英久氏と井上泰夫氏に改めて御礼を申し上げます。

また、本研究は平成20年度自由が丘産能短期大学研究助成を受けて行われた研究成果の一部である。

脚注

- 注1 愛媛大学の佐藤浩章准教授、一柳元成氏（教務課長）に、2004年10月24日に実施したインビュー調査を基にまとめた。
- 注2 国際基督教大学サービス・ラーニング・センターのセンター長佐藤豊教授とコーディネーター村上むつ子氏に、2008年11月17日に実施したインタビュー調査を基にまとめた。
- 注3 立命館大学サービスラーニングセンター、ボランティアセンターの奈良英久氏と井上泰夫氏に2008年11月21日に実施したインタビュー調査を基にまとめた。

参考・引用文献

- 1) 国際基督教大学サービス・ラーニング・センター編. サービス・ラーニング入門. 東京, 2005, 5p., (サービス・ラーニング研究シリーズ, 1)
- 2) ジョン・デューイ (市村尚久訳). 経験と教育. 東京, 講談社学術文庫, 2004, 162p.
- 3) 倉本哲男. アメリカにおけるサービス・ラーニングのカリキュラム開発論. 教育経営学研究紀要第10号. 2007, p.7-16.
- 4) 和栗百恵編. 体験的な学習とサービス・ラーニング. 東京, 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター, 2008, 56p.
- 5) 川瀬隆千. 宮崎公立大学「ボランティア論」の評価に関する研究. 宮崎公立大学紀要. 2006, vol.14, p.85-99.
- 6) 倉本哲男. サービスラーニングにおけるカリキュラムの構成要素－デベロプメント (Development) とマネジメント (Management) の側面から－. 教育経営学研究紀要. 2004, vol.7, p.79-86.
- 7) 中留武昭, 倉本哲男. 学校と地域を結ぶカリキュラム開発の新たな展開－米国のサービスラーニングに焦点を当てて－. 九州大学大学院教育学研究紀要. 2001, vol.4, p.1-35.
- 8) 吉澤寛之・西川和夫 岐阜聖徳学園大学「大学生に対する自己肯定化演習 (2) －授業内実践課題の効果検証－」 2008年日本パーソナリティ心理学会第17回大会発表論文集 p.84-85.
- 9) 井上哲浩 (慶応義塾大学)・金子祐一 (大日本印刷)・鈴木真琴 (NTTデータスミス)・山口 優 (イード)「消費者価値観に基づく消費者行動プロファイルの構築」2009年 第38回消費者行動研究コンファレンス 報告要旨集 p.55-57.
- 10) 国際基督教大学サービス・ラーニング・センター編. サービス・ラーニング入門. 東京, 2005, 79p., (サービス・ラーニング研究シリーズ, 1)
- 11) 国際基督教大学サービス・ラーニング・センター編. 人はなぜサービスをするのか. 東京, 2006, 79., (サービス・ラーニング研究シリーズ, 2)
- 12) 中央教育審議会. 青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について (中間報告案). 2002.
- 13) 大学におけるサービスラーニングの開発に関する研究－概念と取り組みの状況－. 長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要. 2003, vol.1, p.9-16.
- 14) National Youth Leadership Council, “Youth Service : A Paradigm shift”, Fall 1982.
- 15) The Corporation for National and Community Service, “Learn and Serve American Guidelines for Youth Service-Learning and Adult Volunteer Partnerships”, 1998-1999.

資料 1

資料 1

資料 2

「サービスラーニング」アンケート

「サービスラーニング」科目を履修したみなさんにアンケートを実施します。ご協力をお願いします。

1. あなたのコースに○をつけてください。(1つだけ○)

①ビジネスマネジメントコース		②秘書コース		③観光・国際コース	
④経営情報コース		⑤メディアデザインコース		⑥医療・情報サービスコース	

2. あなたが参加している活動の名称に○をつけてください。(いくつでも可)

①SSS活動		②産能祭実行委員		③能友会	
④キャンパススタッフ		⑤ボランティア活動(個人)		⑥何もしていない	

3. 「サービスラーニング」の授業を通して各項目の設問にあてはまる欄に○をつけてください。

あなたにあてはまらない質問項目の場合は、「該当しない」に○をつけてください。

		とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない	該当しない
		5	4	3	2	1	NA
1	「建学の精神」を理解することができた						
2	サービスラーニングを理解することができた						
3	ピアサポートを理解することができた						
4	ボランティアを理解することができた						
5	他のコースの仲間ができた(コース混合のクラスのみ回答)						
6	社会の問題や現状に気づくことができた						
7	設定したテーマを実現するための情報収集ができた						
8	設定したテーマを実現するための手段を考えることができた						
9	自分の考えを他者にわかりやすく伝えることができた						
10	他者(他グループ)の発表から新しい視点を持つことができた						
11	SL活動に興味を持ち、積極的に参加していきたいと思った						
12	自分が体験したことを振り返りができるようになった						
13	自分が体験したことを振り返りシートに記録することができた						

自由記入欄 (この授業を履修した感想など、自由に書いてください。)

資料 3

2009 年度「サービスマーケティング」

振り返りシート (9 月 28 日)

①授業のテーマ ガイダンスとSLについて					
②授業の内容 ガイダンス、評価、サービスマーケティングとは？ 建学の精神とは？					
③自分がクラスまたはグループに貢献した活動内容 グループ内での個人発表や、グループごとに課題に取り組むことが多くあった。 その中で、自分の意見や考えをしっかりと伝えることができたと思う。 グループワークでは、良い雰囲気でも進み意見を言うことができた。 「建学の精神」を自分たちの言葉に置き換えるグループワークでは自分なりに考え、 言葉を挙げるなどすることができた。					
④感想、意見、質問など 初めての授業で、「サービスマーケティングとは何か」を学んだり、「建学の精神」について考えるなど、産能で生活する上で知っておくべきことを学ぶことができたと思う。産能のSLは建学の精神が基になっているというのは知らなかった。建学の精神も自分達の言葉にして書くために意味を考えて読むと、難しくうだと思っていた内容もよく分かってきたと感じる。愛媛大学との意外なつながりにも驚いた。					
⑤自分の今後の課題 さまざまな問題や課題について、自分で考えたりする機会が多いと思うので、広い視野を持てて問題について考えることができるようにしたい。グループワークの場合でも、チームに貢献できるように、しっかりと自分の意見を持ちたい。しかし、おどろきばかりになってもいけないので周囲の人の考えも大切にしていきたい。演習や発表の場では緊張してしまうだろうけれど、有意義なものにしたい。					
コース/クラス	グループ	学生番号	氏名	日付	確認
				9/30	

資料 4

2009 年度「サービスマーケティング」

振り返りシート（11 月 2 日）

①授業のテーマ	発表 と 振り返り				
②授業の内容	・発表、質疑応答 ・振り返り				
③自分がクラスまたはグループに貢献した活動内容	発表で、役割りを果たした。 振り返りで自分の意見を述べた。				
④感想、意見、質問など	この何回か、ボランティアについて考え、討論を深めていくことで、色々と考えさせられた。実現したいことがあるとそれにとりまわって金銭面などの問題が生ずる。その問題にどう取り組んでいくか、グループ内で最終的に話し合い、討議を重ねていくことにより現実味が生まれ、解決策になっていて、やりがいがあった。発表もスムーズに進められて、2グループの考えも他グループの立場に伝えられたかなと思う。				
⑤自分の今後の課題	今回の授業が終ったからといって何もかも忘れるのではなく、ボランティアにたずさわっていくことができたなら良いなと思った。コースをこえた人との討論は、最初は不安だったが、実際にやるととても良いグループでやりやすかった。				

コース/クラス	グループ	学生番号	氏名	日付	確認
				11/2	